

言語における一般性と特殊性： Mian 語の相互関係表現

中 村 嗣 郎

1. はじめに

一般言語理論は世界に存在する自然言語、すなわち人間にとって可能な言語の記述と説明を目的とする。個別言語を観察し他の言語と比較すると、一つひとつの言語は表面的に他の言語と異なっているように見えるかもしれない。しかし、複数の言語間に共通性が見られることは明らかであり（Greenberg 1966/2005 以降の言語類型論の研究やさまざまな言語理論の成果など）、そうした言語の一般性・普遍性を説明するのも言語学の目的の一つである。同時に、個別言語がもつ一見奇妙な特性をも可能な言語の枠内に収めて説明する必要があり、新たな言語現象の発見は理論全体に影響を及ぼす可能性を有している。

本稿は、Fedden (2013) で詳細に分析されている Mian 語における相互関係 (reciprocal) の表現を取り上げ、まず Mian 語という一言語内における一般性と特殊性について考える。そして、次に Mian 語の相互関係表現が一般言語理論に対して提起する問題を論じる。

2. 相互関係表現があらわす意味

近年、さまざまな言語において相互関係がどのように表現されるかに関心が寄せられ、多くの研究成果が発表されている（Frajzyngier & Curl 2000, Nedjalkov 2007a, König & Gast 2008, Evans, Gaby, Levinson & Majid 2011 などの論集を参照）。ここで言う相互関係表現とは英語の *John and Mary love each other.* などの *each other* で示される表現や日本語の「お互い」や「殴り合う」などの表現を指すが、相互関係がどのように表現されるかは言語によって異なり、英語の *each other* のように項で相互関係を示す言語もあれば、日本語の「殴り合う」のように動詞の形態素に何らかの手を加えて相互関係を示す言語もあり、さまざまな表現手段があることが知られている。本稿は Fedden (2013) が分析している Mian 語を取り上げるが、Mian 語の相互関係の表現方法は言語類型論的に見て稀なパターンであり、注目すべき現象と言える。同時に、Fedden の分析にも注目すべき部分があり、一般言語理論はそうした分析方法を取り込んでいくべきだと思われる。Mian 語の具体的な例を見る前に、その相互関係表現があらわす意味などについて確認しておこう。（なお、本稿では、

Mian 語について Fedden 2013 が提示する順序とは意図的に異なった順序で示すが、それは理解のしやすさや本稿での議論を踏まえてのことである。）

英語を中心に相互関係表現があらわす意味が分類されているが (Dalrymple, Kanazawa, Kim, Mchombo & Peters 1998), Mian 語の相互関係表現は以下の4つのタイプの相互関係を示すことができる (Fedden 2013: §4)。それらは、1. 厳格な意味での相互関係 (strong reciprocity), 2. 乱闘形式の相互関係 (melee configuration), 3. 連鎖状の相互関係 (chaining situation), 4. 隣接の相互関係 (adjacency) である。一つひとつについて英語の例を挙げて挙げておこう。

- (1) a. *The members of this family love one another.* [Strong]
b. *The drunks in the pub were punching one another.* [Melee]
c. *The graduating students followed one another up onto the stage.* [Chain]
d. *Five Boston pitchers sat alongside each other.* [Adjacency]

((1a-c) は Evans, Levinson, Gaby & Majid 2000: 8 より,

(1d) は Dalrymple, Kanazawa, Kim, Mchombo & Peters 1998: 161 より)

「厳格な意味での相互関係」は、想定できるすべての対において相互関係が成り立つ場合である。(1a) は、家族の構成員すべてに関して、他の構成員すべてと相思相愛の関係が成立する。このパターンは、参加者が2名の場合に基本的に成り立ち、相互関係の標準的なパターンと見なすことができそうである (Nedjalkov 2007b)。(1b) の「乱闘 (melee)」においては、他人を殴るだけで自分は殴られない人、そして殴られればなしの人がいてもよい。(1c) では「あとについて行く (follow)」ことに関して5人の人物 A ~ E が問題となるならば、A が B のあとについて行く、B が C のあとについて行く、C が D のあとについて行く、D が E のあとについて行くということが成立すればよい (E が誰のあとにもついて行かないことと A のあとに誰もいないことに注意)。

(1d) は、5人のピッチャーが横並びに座っているが、両端の2人を除く3人については左右にピッチャーが座っているが、両端の2人については左右のどちらかにピッチャーが座っていることになる。Fedden (2013) が Mian 語におけるこの意味タイプの例としてあげている表現を見ると (Fedden 2013: 79 例 (49)), 人々が対になって抱き合っている場面なので (1d) とはやや異なる。従って、その例は「二人一組の相互関係 (pairwise)」と分類することができるかもしれない。

- (1) e. *The people at the dinner party were married to one another.* [Pairwise]

(Evans, Levinson, Gaby & Majid 2011: 8)

(1e) はパーティーの席にいる人すべてについて、(一夫一婦制の) 伴侶が同席しているという解釈が成り立つ。

Mian 語では少なくとも上に示したタイプの相互関係をあらわすことができるので、たと

えその表現方法が特殊であっても、一般言語理論の例外としてその分析を排除することはできない。(あとで見るように他言語にも似た表現が見られる。) また、特筆すべきは Mian 語の相互関係表現が相互関係をあらわすために特化されていることである。言語によっては相互関係をあらわす表現が再帰関係 (reflexive) と両義的になることが知られているが、Mian 語ではそうしたことはない。次の例は Somali 語であるが、相互関係表現が再帰関係としても解釈できることが (2b) からわかる。

- (2) a. *Wày (waa + ay) is dishay.*
 DECL + she REFL killed
 'She killed herself.'
- b. *Wày (waa + ay) is arkeen.*
 DECL + they RECP saw
 'They saw each other/They saw themselves/She saw herself.'

(Saeed 1999: 78, König & Kokutani 2006: 279 より引用)

wày という語は平叙 (declarative) の部分 *waa* と代名詞 *ay* に分解でき、*is* は再帰 (reflexive) あるいは相互 (reciprocal) を示す。3 人称女性単数と 3 人称複数の代名詞は *ay* と同形であるため、(2b) の主語は「彼女は」とも「彼女たちは、彼らは」の両方に解釈することができる。後者の場合、*is* の多義性があらわれ、「彼らはお互いを見た」と「彼らは自分自身の姿を見た」の両方に解釈できる。Mian 語の相互関係表現ではこうした多義性は生じず、相互関係をあらわすためだけに存在する。それでは Mian 語を見ることにしよう。

3. Mian 語

本節ではまず Mian 語の基本情報を確認し、次に Mian 語の相互関係表現に触れる。そして、具体的な Mian 語の分析、すなわち Fedden (2013) の分析を紹介する。

3.1. Mian 語の基本情報

Fedden (2013: 61-62) に書かれている情報によると、Mian 語はパプアニューギニアのサンダウン州テレフォミン (Telefomin District of Sandaun Province in Papua New Guinea) で話されている言語で、調査の対象となる西部方言の話者は約 1,400 人ほどであり、話者の多くは複数言語使用者である。Mian 語はパプア諸語のトランスニューギニア語族 (Trans New Guinea: TNG) の中の Ok 語族に属する。

Mian 語は音調言語であり、語には 5 つの音調のどれかが付与される。高 (本稿では Fedden 2013 に倣い、 \bar{a} のように記す)、低高 (\acute{a})、低高低 (\hat{a})、高低 (\grave{a})、低 (a) である。主要部標示 (head-marking) の言語であり、動詞の項などは形態素として動詞の語幹に接

言語における一般性と特殊性：Mian 語の相互関係表現

続して表現され、語が形成される。次に簡単な例を挙げる。

(3) *naka=e unáng=o wa-têm'-Φ-e=be*
man=SG.M woman=SG.F 3SG.F.O-see.PFV-REAL-3SG.M.SBJ=DECL

'The man saw the woman.' (Fedden 2013: 63 例 (10))

例 (3) は 3 語から成る。3 語目は 5 つに分解でき、順番に 3 人称単数女性目的語、動詞 see の完了相 (perfective), 事実 (realis), 3 人称単数男性主語、平叙を示す。= x は接語 (clitic) であることを示す。(3) は主語と目的語を第 1 語と第 2 語で明示的に示しているが(主語—目的語—動詞の語順がふつう)、誰を指すかが文脈からわかれば、第 3 語のみで「彼が彼女を見た」と表現できる。本稿では Fedden (2013) 他を基本的に参考とし、次の略号を使用する。

(4) 略号

1 - first person (1 人称), 2 - second person (2 人称), 3 - third person (3 人称),
A - Agent/transitive subject (動作主/他動詞主語), AN - animate (有生物),
+CLOSE - deictic 'hither' (直示的「こちら」), COLL - collaborative (共同の),
CONJ - conjunction (接続詞), CP - classificatory prefix (分類のための接頭辞),
CTR - contrastive (対比), DECL - declarative (平叙), DS - different subject (異主語),
DAT - dative (与格), DEM - demonstrative (指示詞), DU - dual (双数),
ERG - ergative (能格), F - feminine (女性), GPST - general past (一般的過去),
ImmPast- immediate past tense (近接過去時制), INCL - inclusive (包含),
IPFV - imperfective (非完了), M - masculine (男性), MED - medial verb (中間動詞),
N1 - neuter 1 (中性 1), N2 - neuter 2 (中性 2), NOM - nominative (主格),
NPST - non-past (非過去), O - object (目的語), PFV - perfective (完了),
PL - plural (複数), PN - proper noun (固有名詞), PRED - predicate marker (述語標識),
PRS - present tense (現在時制), PST - past tense (過去時制), REAL - realis (事実),
RECP - reciprocal (相互形), REFL - reflexive (再帰形), SBJ - subject (主語),
SEQ - sequential (逐次的), SG - singular (単数), SIM - simultaneous (同時的),
SS - same subject (同主語)

Fedden が収集したデータには約 400 種類の動詞語幹があるが、そのうちの約 3 分の 2 では完了・非完了が明示的であるが、残りは同じ形で完了・非完了の両方に使える。

Mian 語の相互関係表現を理解するには、この言語の特徴である項の相互指示 (argument co-referencing) と節連鎖における転換指示 (switch reference in clause chains) を理解しておく必要がある。例 (3) の第 3 語では主語と目的語がそれぞれ接尾辞と接頭辞として実現されていた。言語全体ではどうなっているかと言うと、主語はすべての定形動詞に代名詞的な接尾辞として記される。他方、目的語の標示については 3 つに分かれる。1 つは (3)

のように代名詞的な接頭辞として表示される場合だが、これは7つの動詞語幹に限られる (-*tēm'* 「見る PFV」, -*temē'* 「見る IPFV」, -*lò* 「殴る, 殺す PFV」, -*nā'* 「殴る, 殺す PFV」, -*e* 「殴る, 殺す IPFV」, -*ntamā'* 「噛みつく PFV」, -*fū'* 「つかむ PFV」; 意味だけ見ると「見る」「殴る, 殺す」「噛みつく」「つかむ」)。もう1つは約50個の動詞で義務的となる接頭辞だが、give, put, throw, get, turnなどに相当する物体を操る意味をもつ動詞に限られる。これらの接頭辞は性・形状・機能などの特徴や数などを示すものであるが、代名詞的接頭辞とは異なった体系を成す。最後の1つは目的語を標示しない場合で、実はほとんどの他動詞がこれに該当する。

- (5) *Milsen=e ablam=o dowôn'-Φ-e=be*
 PN=SG.M nut_species=PL.N1 eat.PFV-REAL-3SG.M.SBJ=DECL
 'M. ate the ablam nuts.' (Fedden 2013: 63 例 (9))

第3語に注目すると、他動詞であるが目的語の情報がないことがわかる。

Mian 語では、いま発話している節の主語が次にあらわれる節の主語と同じか否かを示すのが典型的である。いわゆる転換指示 (switch reference) が見られる言語である。最終節の動詞では時制, 極性, 発話内力などが記され, 節の連鎖全体を作用域とする。接尾辞 *-s* と *-b* は続く節は主語が異なることを示すが, *-s* は続く節が逐次的 (sequential) に起こることも示し, *-b* は同時 (simultaneous) に起こることも示す。従って, *-s* は DS.SEQ, *-b* は DS.SIM という注釈になる。(6a) の1行目の第3語にある *-s*, (6b) の1行目の第3語にある *-b* がその実例である。

- (6) a. *ē bín=o we-s-e=a*
 3SG.M floor=N2 sweep-DS.SEQ-3SG.M.SBJ=MED
naka mak=e unín=o fu-n-e-bio=be
 man other=SG.M food=N2 cook-REAL-3SG.M.SBJ-GPST=DECL
 'He swept the floor and then somebody else prepared food.'
- b. *ē bín=o we-b-e=a*
 3SG.M floor=N2 sweep-DS.SIM-3SG.M.SBJ=MED
naka mak=e unín=o fu-b-e=be
 man other=SG.M food=N2 cook-IPFV-3SG.M.SBJ=DECL
 'While he swept the floor, somebody else prepared food.'
- (Fedden 2013: 66 例 (16), (17))

(6a) では男の床掃除が他者による食事の準備に先行し, (6b) では同時に起こる。

3.2. Mian 語の相互関係表現

2節で Mian 語には相互関係専用の表現があると述べたが、実際にはそうした表現は2種

類ある。1つはジグザグ構文 (the zigzag reciprocal construction) と呼ばれ、同じトランスニューギニア語族の Amele 語と Hua 語にも似たような表現が見られる。もう1つは *sese* 構文 (the *sese*-reciprocal construction) と呼ばれるが、これは Mian 語のみに見られる表現方法である。これから2つの構文を見ていくが、それらには共通性があり、Fedden (2013) は歴史的に考えて後者が前者のジグザグ構文から発達した構文であるという主張をしている。これについてはあとで取り上げる。

両構文の具体的な構成を見る前に、それぞれの構文がもつ一見奇妙な特性をいくつか述べておく。相互関係が成立する人物が男性1人と女性1人である場合 (英語で言うと *John and Mary are hitting each other.* のような場合)、ジグザグ構文では問題なく表現できるが、*sese* 構文では表現できない。また、*sese* 構文は1人称について表現できるが (*We are looking at each other.* のような場合)、ジグザグ構文は3人称に限定される。こうした特性は Mian 語がもつ文法的特徴を考慮することで自然に説明できると考えられる。

3.2.1. ジグザグ構文

ジグザグ構文は3つの動詞から成り、最初の2つの動詞は相互関係が問題となる行為をあらわす。行為者が2人と考えるならば、「AがBを見て、BがAを見て」のような感じである。そして、3つ目の動詞は、文字通りには「AとBが存在する」という意味で、表現される命題が共同行為 (joint activity) であることを示していると考えられる (3つの動詞の前に主語を明示的に表現することも可能)。次が具体例だが、(7) は相互関係が男性一人と女性一人の2者間に成立する場合にのみ使うことができる。

- (7) (i) *a-nâ-s-e*
 (3PL) 3SG.M.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
wa-nâ-s-e
 3SG.F.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
 ‘They (F+M) are hitting each other.’ (Fedden 2013: 61 例 (7))

最初の動詞 *a-nâ-s-e* を分解すると、目的語が3人称単数男性であること、動詞の意味が「殴る」で完了相であること、この動詞の主語と後続する動詞の主語が異なり両事象の関係が逐次的 (sequential) であること、主語が3人称単数男性であることがわかる (直訳すると「彼が彼を殴って」となるが実際には「彼女が彼を殴って」の意)。2つ目の動詞では主語と目的語の関係が逆転している (「彼が彼女を殴って」)。ここで注意すべきは、最初の動詞で明らかのように、主語が3人称単数男性に固定されていることである。また、転換指示 (switch reference) の使い方も通常とは異なっており、第2動詞における標識は第1動詞に対して

異なった主語であることを示している。本来であれば、第2動詞の標識は3つ目の存在動詞の主語との関係を示すことになり、それは包含関係にあるから「同主語」という標識になるはずだがそうになっていない。ここから第2動詞は第1動詞と「違う主語」であることを示していると考えるのが妥当である (Fedden 2013: 73)。このようにジグザグ構文は全体をすべて部分に還元できず、固定表現としての性質を備えている。他にも、通常であれば動詞のあとに接続するはずの中間動詞 (medial verb) の標識が使えないなどという特徴などもあり、Fedden (2013: 76) は3つの動詞が1つの節を成していると主張する。

2者間の相互関係が同性間で成立する場合、1つ目の動詞と2つ目の動詞は同形となる。

- (8) a. (ī) *a-nā́-s-e*
 (3PL) 3SG.M.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
a-nā́-s-e
 3SG.M.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
 'They (two males) are hitting each other.'

- b. (ī) *wa-nā́-s-e*
 (3PL) 3SG.F.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
wa-nā́-s-e
 3SG.F.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They (two females) are hitting each other.' (Fedden 2013: 61 例 (5), (6))

(8a) は男性2人について、(8b) は女性2人について述べた表現である。(8b) において「殴る」の主語は男性として表現されるがこれは固定表現ゆえである。3つ目の存在動詞の主語が(8a)と(8b)で同形だが、これは Mian 語においては3人称複数の代名詞が性を区別しないからである (Fedden 2013: 65 表2を参照)。

3.1節で、Mian 語では目的語の情報を接辞として表現しない動詞があることに触れたが、以下はそうした場合の例である。

- (9) *ī dowôń-s-e*
 3PL eat.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
dowôń-s-e
 eat.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

‘They eat each other.’ (Fedden 2013: 71 例 (35))

この場合、目的語の情報が明示されていないため、男+女、女+女、男+男に使うことができる。また、参加者が3人以上であっても (9) を使うことができる。

目的語の情報を接辞として表現する場合、参加者が2人であるか、3人以上であるかで表現方法が異なる。2人の場合は (8) で見た通りだが、3人以上の場合は以下のように表現する。

- (10) (i) *i-nā'-s-e*
 (3PL) PL.AN.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
i-nā'-s-e
 PL.AN.O-hit.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

‘They (more than two) are hitting each other.’ (Fedden 2013: 61 例 (4))

参加者が2人の場合との違いは目的語が複数を示しているところである。相互関係には複数の事象が関与するが (*John and Mary hit each other.* では John hit Mary. と Mary hit John.), こうした Mian 語の表現には意味と形式の間に部分的な類像性 (iconicity) が存在する (Fedden 2013; Haiman 1980 も参照) と考えると、自然な説明ができそうである。すなわち、第1動詞と第2動詞において、相互関係における個々の事象 (下位事象) が表現されていると考えると、参加者が2人の場合には目的語が単数であり、3人以上の場合では複数であるから、そうした表現が自然に見えてくる。だが、3人以上の場合であってもそうした下位事象が2つの動詞 (= 同じ動詞の一度だけの繰り返し) に留められるのは (慣習化し固定化した) 言語表現だからであろう。(10) は目的語の部分を除くと2者間における相互関係の表現と同じである。

3つ目の存在の動詞は相互関係となる行為が共同行為であることを示していると考えられる。Mian 語のジグザグ構文と類似した表現が同じトランスニューギニア語族の Amele 語と Hua 語にも見られるが (Fedden 2013), そこでも複数を主語とする表現が最後に付随する。

- (11) Amele 語
age qet-u-do-co-b qet-u-do-co-b eig-a
 3PL cut-PRED-3SG-DS-3SG cut-PRED-3SG-DS-3SG 3PL.SBJ-TODPST
 ‘They cut each other.’

(Roberts 1987: 132, Fedden 2013: 73 例 (37) より引用)

Mian 語のジグザグ構文で注目したいのは、第1と第2の動詞が *-s-e* で終わっていることである (異主語の転換標識 *-s* と固定した3人称単数男性主語 *-e*)。これが次に見る *sese* 構文と繋がり、Fedden (2013) はジグザグ構文から *sese* 構文が生まれたと考える。なお、

Amele 語と Hua 語には *sese* 構文に相当する表現方法は存在しない。また実は Mian 語には上で見たジグザグ構文の仲間となる構文もある。上の Mian 語の例では *-s-e* における接辞 *-s* は「異なる主語」という情報と「逐次的」という情報を示すが、*-s* でなく *-b* となるパターンもあり、非完了の動詞に接続する (*-b* は「異なる主語」と「同時性」を示す)。なお、この場合、*sese* 構文に対応する *bebe* 構文は存在しない (Fedden 2013: §5)。

3.2.2. *sese* 構文

sese 構文は複合的な動詞 1 語によって相互関係をあらわす表現である。目的語が接辞として表現される場合は前節で見たジグザグ構文と似た可能性になる。次は参加者が 2 人の場合である。

- (12) a. (i) *a-nā'-sese-bl-Φ-io=be*
 (3PL) 3SG.M.O-hit.PFV-RECP- exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
 'They (two males) are hitting each other.'
 b. (i) *wa-nā'-sese-bl-Φ-io=be*
 (3PL) 3SG.F.O-hit.PFV-RECP- exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
 'They (two females) are hitting each other.'

(Fedden 2013: 59 例 (2), (3))

(12a, b) では「殴る」の目的語がそれぞれ *a-*, *wa-* という接頭辞として示されている。目的語が単数を示す場合、2 者間の相互関係に限定されるというのはジグザグ構文と同じである。ジグザグ構文では「殴る」の主語が 3 人称単数男性に固定されて示されたが、*sese* 構文ではその主語は表現されない。そして、ジグザグ構文にはなかった *sese* という接辞が加わっている。複合動詞の後半では存在の動詞とその主語が表現されている。ジグザグ構文では男一人・女一人の場合は目的語の接尾辞を替えることで相互関係を表現できたが、*sese* 構文では目的語は一度しかあらわれないため、男女 2 人の間の相互関係を *sese* 構文で表現することはできない。

参加者が 3 人以上の場合は次のような表現となるが、ジグザグ構文と同様に性の問題は生じない。

- (13) (i) *i-nā'-sese-bl-Φ-io=be*
 (3PL) PL.AN.O-hit.PFV-RECP- exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
 'They (more than two) are hitting each other.' (Fedden 2013: 59 例 (1))

目的語の情報が接辞として表現されない場合、参加者の人数は限定されないし、性の問題も生じない。

- (14) *ī dowôn'-sese-bl-Φ-io=be*
 3PL eat.PFV-RECP-exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

‘They eat each other.’ (Fedden 2013: 69-70 例 (30))

以上、Mian 語のジグザグ構文と *sese* 構文の概略を見たが、特に後者の *sese* 構文だけを見ているはその特異性は不可解である。参加者が2人であるか、3人以上であるかが目的語の数と連動するのはなぜか、男1人と女1人の相互関係を表現できないのはなぜか、存在の動詞とともに主語が示されるのはなぜかといった疑問が湧いてくる。しかし、*sese* 構文だけでなくジグザグ構文を見ると、そうした疑問が解消されてくる。例えば、*sese* 構文では表現できない男1人と女1人の相互関係はジグザグ構文で表現可能であった（(7)を参照）。一方、ジグザグ構文は3人称に限定されるが（Fedden 2013: 72）、包含の1人称複数の場合は *sese* 構文で表現可能である。

(15) a. * *nībo na-tēm's-e*
 1PL.INCL 1SG.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
ka-tēm's-e
 2SG.O- see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bi-Φ-obo=be
 exist-IPFV-1PL.SBJ=DECL

Intended: ‘We (INCL, i.e., you and me) are throwing glances at each other.’

(Fedden 2013: 72 例 (36))

b. *nībo ya-tēm'sese- bi-Φ-obo=be*
 1PL.INCL PL.AN.O-see.PFV-RECP- exist-IPFV-1PL.SBJ=DECL

‘We (INCL) are throwing glances at each other.’ (Fedden 2013: 68 例 (25))

(15a) のジグザグ構文が不適格であるのに対して、(15b) の *sese* 構文は文法的である。

Mian 語の相互関係は主語と目的語の関係に限られず、主語と受益者 (recipient) であってもよい（詳細は Fedden 2013 を参照のこと）。それ以外にもジグザグ構文および *sese* 構文には興味深い特徴がある。例えば、参加者数と事象の同時性の解釈には密接な関係があるが（Fedden 2013: 80 表3を参照）、本稿ではこれ以上立ち入らないこととする。

3.2.3. *sese* 構文の起源：Fedden (2013) による歴史的シナリオ

本節では Fedden (2013) がどのようにジグザグ構文と *sese* 構文という2つの構文を関連づけるかを見る。*sese* 構文はジグザグ構文から生まれたと Fedden は仮定するが、ジグザグ構文自体はどのように生まれたのだろうか。Fedden のストーリーを追ってみよう。

3.2.3.1. ジグザグ構文の誕生

Mian 語では節を繋げ、そのあとに別の節が来る場合、通常、その節の動詞の最後に中位であることを示すための標識 =*a* が接続する。したがって、「見る」という行為が連続して

起こり、それを言語化した場合は次のようになる。

- (16) \bar{e} $a-t\acute{e}m'-s-e =a$
 3SG.M 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ=MED
 $mak=e$ $a-t\acute{e}m'-s-e =a$
 other=SG.M 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ=MED
 'he_j glances at him_k, the other_k glances at him_j, and then ...' (where $j \neq k$)
 OR 'he_j glances at him_m, the other_k glances at him_m, and then ...' (where $j \neq k \neq m$)
 (Fedden 2013: 84 例 (57))

(16) では、2つの事象が2つの動詞（そして2つの節）で表現されているが、それぞれ最後に $=a$ という接語があり、そのあとに別の節が続くことを示している（したがって、(16)のあとにはさらに別の節が続く）。固定化されたジグザグ構文には $=a$ の標識がないことに注意されたい。(16) は多義的であり、「男 A が男 B を見て、B が A を見る」と解釈することもできるし、「男 A が男 C を見て、男 B も C を見る」と解釈することもできる。別の見方をすると、2つの節を使えば、相互関係で問題となる具体的な下位事象を（多くの言語でそうであるように Mian 語でも）表現することができる。

Fedden が仮定する次の段階は、(16) のように複数の節で表現された事象群がより大きな事象 (macro-event) として認識され、まとまり (構文) を成すというものである。大事象構文には同一の（あるいは似通った）下位事象が複数含まれることになるが、形式面では次の2つによって構文であることが示される。すなわち、中位を示す $=a$ が落ち、存在をあらわす動詞が新たに最後に加わる。

- (17) $imak=e$ $mengge-s-e$ (eka)
 husband=SG.M pull.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ (and)
 $aai=e$ $mengge-s-e$
 water=SG.N1 pull.PFV-DS.SEQ-3SG.N1.SBJ
 $bi-n-ib=a$
 exist-SEQ-2/3PL.AN.SBJ=MED
 'the husband is pulling and the water is pulling (on the woman), they are (doing this) and then ...' [Flood] (Fedden 2013: 85 例 (59))

(17) は波にさらわれそうな妻を夫が引っ張ろうとしている場面の描写である。第3動詞として存在動詞があらわれ、そこでは夫と水が主語になっている（複数に対応する代名詞の接尾辞 $-ib$ ）。なお、存在動詞の出現によって、第2動詞に接続している転換指示の役割を担う $-s$ は通常とは異なった用法を確立し、第1動詞とは異なった主語であることを示すようになっていると考えられる。

(16) であらわされる事象を1つの大きな事象ととらえ、(17) のような大事象構文で次のよ

がある以上、目的語の接頭辞を（例えば3人称単数男性に）固定化し義務化するならば、一種の矛盾が生じてしまう。一方、主語の接尾辞はどのような動詞でも義務的にあらわれるので、こちらを固定化し表現するのはそれほど不自然ではない。(19) が2人の男について述べていることがわかれば、同じ形の動詞が用いられることから、AがBに対しておこなう行為をBがAにおこなうことが推測できる。そうしたことから、第1動詞の主語（および目的語）がどちらの男（AかBか）を指すのかは問わず全体を相互関係として解釈するという規約が生まれたのだろう。

Fedden は、3つの動詞全体で1つの構文となっていることの証拠として、最初に明示的な主語を置く場合は複数形でなければならないことを挙げている。

- (20) *ī a-tēm'-s-e*
 3PL 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
wa-tēm'-s-e
 3SG.F.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They (M+F) are glancing at each other.' (Fedden 2013: 86 例 (62))

(20) では3人称複数の代名詞主語 *ī* が最初に置かれており、これは存在動詞の主語と性と数において一致しなければならない。(また Fedden は明示的に述べていないが、相互関係表現として確立したジグザグ構文では第1動詞と第2動詞の間に接続詞 *eka* は置けないと思われる。)

ジグザグ構文が確立するという事は決まったパターンで相互関係を表現することであり、それは3つの動詞（下位事象動詞の繰り返しと存在動詞）で最初の2つの動詞では主語を固定して表現するものである。Mian 語の場合、参加者が3人以上の場合は目的語を複数として表現することはすでに見た。また、男性1人と女性1人の間の相互関係も目的語の情報によってその関係を示すことができることもすでに見た。

- (21) *a-tēm'-s-e*
 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
wa-tēm'-s-e
 3SG.F.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They (F+M) are glancing at each other.' (Fedden 2013: 86 例 (61))

1つ目の動詞は形式的には主語も目的語も男性だが、意図される意味にはそうした関係は存在しない。構文として相互関係が成立するように解釈しなければならないため、第1動詞は

言語における一般性と特殊性：Mian 語の相互関係表現

女が男を見るという解釈、そして全体としては男と女が見つめ合っているという解釈がもたらされる。

本節では Mian 語に見られる他の表現と比べることでジグザグ構文がその言語内において自然に位置づけられることを見た。Mian 語がもつ諸特徴を考慮すると、一見、不可思議な構文もその言語においては納得のいく地位を保っていることがわかる。(21) を (Mian 語の特徴を無視して) 表面的に解説すると以下ようになる。「ある言語では相互関係を 3 つの動詞と最初の代名詞で表現する。男 1 人と女 1 人が見つめ合っているという意味は次のように表現する。1. 複数主語代名詞 (男と女をあらわす) 2. 動詞「見る」(主語・目的語ともに 3 人称単数男性) 3. 動詞「見る」(主語は 3 人称単数男性, 目的語は 3 人称単数女性) 4. 存在の動詞 (主語は複数で男と女をあらわす)。」これだけ聞くと、なぜそれで意図した意味が表現できるのか理解できないが、それが Mian 語のジグザグ構文である。すでに説明したように、Mian 語の諸特徴と慣習化し固定化した言語特性を考慮することで、ジグザグ構文は Mian 語の中に自然に位置づけられる。

それではジグザグ構文からどのようにして *sese* 構文が生まれたのであろうか。

3.2.3.2. *sese* 構文の誕生

ジグザグ構文において、第 1 動詞と第 2 動詞の最後の接辞がともに *-s-e* になることはすでに見たが (動詞 *-s-e* 動詞 *-s-e*)、Fedden はここから音韻縮約 (phonological reduction) が起こり、*sese* 構文 (動詞 *-sese*) が生まれたと考える。Fedden は以下のような例を挙げてこの過程を説明する。

- (22) *a-têm'-s-e*
3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
~~*a-têm'-s-e*~~
3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
'They are glancing at each other.' (Fedden 2013: 86 例 (63))

第 1 動詞と第 2 動詞は同形だが、第 2 動詞で打ち消し線で示した部分、すなわち目的語と動詞の部分が落ちることで相互関係の接尾辞 *-sese* が生まれたと Fedden は考える。

- (23) 仮説上の構文 (Hypothetical construction)
a-têm'-sese *bl-Φ-io=be*
3SG.M.O-see.PFV-RECP exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL
'They (M+M) are glancing at each other.' (Fedden 2013: 87 例 (64))

(23) の形式つまり独立した 2 つの動詞による表現は仮説上のものであり、実証されている

ものではない。そうではあるが、音韻的に消失した情報は第2動詞の目的語と動詞であり、相互関係を意図することがわかれば、それらの情報は容易に復元可能である。動詞については第1動詞と同一でなければならず、また目的語についても第1動詞にあった目的語の情報と同一ということになる。構文全体で見ると、目的語の情報が3人称単数男性であれば、男性2人の間の相互関係になり、3人称単数女性であれば女性2人の間の相互関係ということになる。3人称複数（性の区別なし）であれば、性別を問わない3人以上の間の相互関係をあらわすことになる。また、目的語の情報が示されない動詞であれば、主語の人数や性別は問われない。

形式として2語であった(23)のような固定表現が歴史の中で一語化(univerbation)して *sese* 構文が生まれたとしても不思議ではないが、Fedden はそうした変化が起こったと考える。

(24) *a-têm'-sese-bl-Φ-io=be*

3SG.M.O-see.PFV-RECP-exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They (M+M) are glancing at each other.' (Fedden 2013: 87 例 (65))

もともと複数の語でしか表現できなかった命題が1語で表現できるのであれば効率が高くなったと言える。*-sese* という新たな接尾辞がそれを可能にするのであれば、言語使用者がそれを採用するのは不自然ではない。結果として興味深いのは、*sese* 構文では男性1人と女性1人の間の相互関係が表現できないということである。しかしながら、Mian 語にはジグザグ構文があるので、そちらで表現することが可能である。すると、Mian 語話者の言語知識においてはジグザグ構文と *sese* 構文が密接に結びついていることがわかる。例えば、2者間の相互関係を表現する場合、同性間であればジグザグ構文でも *sese* 構文でもよいが、異性間ではジグザグ構文しか使えない。また、1人称複数が主語の場合、*sese* 構文は使えるがジグザグ構文は使えない((15)を参照)。対して、(3人以上の)3人称複数であれば、両構文が使用可能である。これは目的語の情報を接辞として表現する動詞の場合であるが、表現しない場合はそうした考慮が不要となる(Fedden 2013: 80 表3を参照)。

3.3. 一般性と特殊性

上では、Mian 語で相互関係をあらわす表現(ジグザグ構文と *sese* 構文)とそれぞれがどのようにして固定化したかという Fedden (2013) の仮説を見た。Fedden は通時的な構文の発達について述べているが、一個人内でどのような順序で習得されるかについて何か主張しているわけではないことに注意したい。*sese* 構文をジグザグ構文と(当初は)結びつけずに習得する可能性は否定できないし、ジグザグ構文を Fedden が仮定した段階を追って習得するとも限らない。しかし、両構文がもつ特異性を説明するには Fedden の仮説は重要であり、特に成人の Mian 語の言語知識体系においては、関係する言語事実の蓄積から、両構文

に密接な関係があるのは否定しがたく、何らかの形でジグザグ構文と *sese* 構文を理論的に関連づける必要があろう。今までの説明から明らかなのは、両構文の関係を述べるためには Mian 語という個別言語がもつ特徴に詳しく触れる必要があるということである。

その一方で、個別言語の特徴の中にも一般的な特徴とそれに比べると特殊と見なせる特徴があり、両者を区別することが必要である。言語には、一般性の高いものが特化していく場合もあるし、特化されていたものが一般していく場合もあるが、ジグザグ構文から *sese* 構文が生まれたとする Fedden の説明ではどうなっているかを簡単に整理することにする。まず、ジグザグ構文であるが、(21) を (25) として再掲する。

- (25) *ī a-têm'-s-e*
 3PL 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
wa-têm'-s-e
 3SG.F.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They (F+M) are glancing at each other.' (Fedden 2013: 86 例 (62))

このようなジグザグ構文が生まれるにあたって Fedden が基本と考えたパターンは①男性 2 者間の相互関係事象であり、②目的語の情報が接頭辞としてあらわれる表現であった。①に関連する例は (19) だが、以下に再掲する。

- (26) *a-têm'-s-e*
 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
a-têm'-s-e
 3SG.M.O-see.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ
bl-Φ-io=be
 exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

'They are glancing at each other.' (Fedden 2013: 85 例 (60))

①について、まずなぜ 2 者間なのかということについて考えてみよう。これは、ジグザグ構文の最初の 2 つの動詞が相互関係をあらわす下位事象を具体的に言語化していると考えれば、2 つの動詞で 2 つの事象をあらわすという類像性の高い表現のほうが形式と意味の間に透明性が見て取れるという点で好ましいと考えられる。また、Fedden (2013: 80 表 3) によると、目的語が接辞として表現される場合、2 者間の事象は逐次的な解釈のみ可能で同時的な解釈はできないとあるので、これも類像性のあらわれと取ることもできる。そう考えると、本来的に相互関係をあらわす動詞（英語で言うと *meet/marry/fight* など）がジグザグ構文で表現されるのは興味深い (*sese* 構文でも表現可能)。

- (27) *ī mī'-s-e*

3PL meet.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ

mí-s-e

meet.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ

bl-Φ-io=be

exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

‘They (2 or more) met each other.’ (Fedden 2013: 81 例 (53))

「会う」という事象は A が B と会えば、論理的に B が A と会うことが導かれるため、この単一事象をわざわざ動詞を 2 度繰り返して表現することにはある意味不自然である。これは、本来は複数の独立した下位事象を表現するために用いられたジグザグ構文が幅広く用いられるようになったためではないかと考えられる。(なお、Fedden 2013: 80 表 3 によると、目的語が標示されない場合は逐次的な解釈と同時的な解釈の両方が可能なので、(27) は非文法的にはならない。)

さらに①について、なぜ主語が 3 人称単数かということについては、上で見たように、第 1 動詞と第 2 動詞は下位事象をあらわし、そこでは単数が主語になるため、類像性が保たれているからだと考えることができる。それでは、なぜ男性であって、女性でないのかについては Fedden (2013) からは読み取れず、男性となりやすい特徴が Mian 語に存在するのかが今のところ不明である。

②について、Fedden は、(26) のように目的語が接頭辞で表現される例を使い、(9) のように目的語の接頭辞が表現されない例は使わなかった ((28) として再掲)。

(28) *ī dowôn-s-e*

3PL eat.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ

dowôn-s-e

eat.PFV-DS.SEQ-3SG.M.SBJ

bl-Φ-io=be

exist-IPFV-2/3PL.AN.SBJ=DECL

‘They eat each other.’ (Fedden 2013: 71 例 (35))

3.1 節で Mian 語の基本情報を確認したように、Fedden が収集した約 400 個の動詞語幹のうち、(26) のように代名詞的な接頭辞で目的語を示すのは「見る」「殴る、殺す」などを意味する 7 つの動詞語幹に限られ、大半は目的語を標示しない動詞である。それにもかかわらず、(26) にある動詞語幹を説明に用いたのには意図があるのかもしれない。先の (26) の最初の 2 つの行為動詞は字義通りに解釈すると he SEE him と he SEE him である。これは付属している接辞から明らかであり、指示的な接辞からそうした解釈が強制される。そして、場面において指示物が限定されれば、 he_j SEE him_k と he_k SEE him_j が意図されることになる。一方、(28) のような場合では表現だけからは目的語が何を指示するかは不明であり、文脈

の助けがあったとしても（特に聞き手の立場から考えた場合）*he EAT OBJ* と *he EAT OBJ* を $he_j \text{ EAT } him_k$ と $he_k \text{ EAT } him_j$ と解釈するのは SEE の場合ほど容易ではない。したがって、文法的に解釈が狭まるような (26) の例をジグザグ構文の起こりとしたことには意味があると考えられる。この点で、目的語を接頭辞として示す動詞語幹が「見る」「殴る、殺す」「噛みつく」「つかむ」といった相互関係に使えるような意味であることは興味深い。同時に、*give*, *put*, *throw*, *get*, *turn* などに相当する物体を操る意味をもつ動詞についても異なった体系の接頭辞があらわれることを考慮すると、Mian 語でどのような意味の場合に目的語が接頭辞としてあらわれるかを相互関係表現とは別に考察する価値がある。以上のことから、(26) のような例を使い、なぜジグザグ構文が生まれたかを示す Fedden の議論は、透明性がある表現、換言すると合成的な表現が、同形の繰り返しという音声的特性を理由の一つとして、固定化した表現になっていく仮説と考えることができる。これは *sese* 構文にも言えることであるが、そうして特化した表現は別の要因からも拡がりをもつようになっていったと考えられる ((27) の「会う」の例や (15) の 1 人称主語の例)。

Fedden は、確立したジグザグ構文を基にして *sese* 構文が生まれたと仮定するが、その議論で排除されることになるパターンは (25) のような男女 2 者間の場合である。この場合は第 1 動詞と第 2 動詞が同形ではないため、音韻縮約のための条件が整わない。しかし、同形であれば、主語の数や性は 3 人以上であっても女性 2 者間であってもよいし、また、目的語の接辞がなくてもよいと考えられる。ジグザグ構文が確立し、動詞の語尾が *-s-e* であり 2 つの動詞全体が同形であれば、*sese* 構文の誕生は説明できるので、Fedden がジグザグ構文と同様に男性 2 者間の事象を使って *sese* 構文を説明したのは便宜上の理由からと考えてよいのではないだろうか。

Fedden (2013) はその中で特に扱っていないが、ジグザグ構文と *sese* 構文がどのように異なるのか気になる場所である。これは Fedden が述べていることだが、Mian 語は主語となる代名詞を表現しなくてもよい言語であり、したがって、(25) や (26) のようなジグザグ構文において最初の 3 人称複数 *i* がなければ別の解釈も許されることになる。対して、*sese* 構文は相互関係をあらわすために特化された構文である。何らかの条件によってどちらかの構文が好まれることがあるのだろうか。

両構文の違いでわかっていることは、(15) の例で見たように、1 人称と 2 人称の場合、ジグザグ構文は使えず、*sese* 構文なら使えるということである (Fedden 2013: 72 で「ジグザグ構文は 3 人称に限定される (The zigzag construction is restricted to the third person.)」と明言している)。この事実を Fedden の通時的な仮定の枠内で考えると興味深い。現代の Mian 語ではジグザグ構文と *sese* 構文が共存しているが、Fedden の仮説が正しければ、歴史的なある時点においてはジグザグ構文しかなかったことになる。すると、その時には 1 人称と 2 人称の相互関係表現はどうしていたのだろうか。ジグザグ構文が 3 人称にのみ限られ

ていたとは考えにくいので、最初は1人称と2人称にもジグザグ構文（あるいはその前の段階のパターン）が使われたのかもしれない。もしそうであった場合、*sese* 構文が誕生することで、1人称と2人称の場合は *sese* 構文でのみ表現されるようになった可能性がある。この辺りの事実がはっきりしないので断定的なことは言えないが、もしそうであるなら、それはジグザグ構文の下位事象が3人称（単数男性）で表現されるため、1人称あるいは2人称をジグザグ構文で表現しようとする、矛盾した解釈が強制されることからジグザグ構文が回避されるようになったのかもしれない。

また、Fedden の仮説で興味深いのは、当初は独立した節であったものがジグザグ構文としてまとまり（Fedden は単一の節であると主張）、*sese* 構文として明らかに単一の節となったということである。これは言語理論を節のレベルに限定・固定しては得られない見地であり、言語研究の対象を先験的に限定してしまうことの危険性を知らしめてくれるものである。

以上、Mian 語という個別言語の中での一般性と特殊性を見たが、次に他の言語にも範囲を広げ、一般性と特殊性の問題を考えてみたい。

4. 言語類型論的観点から見た相互関係表現

相互関係をあらわす表現方法は実に多様で、一言語内においても複数の表現方法をもつ言語が多く（Comrie 2007）、言語の普遍性・可能性を考えた場合、どのような表現方法が可能なのか絞り込むことが必要となる（Evans 2008）。さまざまな表現方法の中で、Hua 語、Amele 語、そして Fedden (2013) が取り上げた Mian 語に見られる表現方法は特異であると言われている。（諸言語の相互関係表現については Nedjalkov 2007a や König & Gast 2008 や Evans, Gaby, Levinson & Majid 2011 などを参照されたい。）

Fedden (2013) によると、Hua 語と Amele 語でもジグザグ構文に相当する表現が可能であるという。そこで両言語の事実関係を確認しておく（Amele 語については (11) も参照）。

(29) Hua 語

a. *Joe Harry ebgí + ga + na Harry Joe ebgí + e.*
 J. H. hit 3SG 3SG H. J. hit 3SG
 ‘Joe hit Harry and Harry hit Joe.’

b. *Joe Harry ebgí + ga + na Harry Joe ebgí + ga + na ha + ?e.*
 J. H. hit 3SG 3SG H. J. hit 3SG 3SG do 2/3DU
 ‘Joe and Harry hit each other.’

(Haiman 1980: 532-3, Nedjalkov 2007c: 152 より引用)

(30) Amele 語

言語における一般性と特殊性：Mian 語の相互関係表現

- a. *Dana ale qo-Φ-co-b qo-Φ-co-b esi-a.*
 man 3.DU hit-DO-DS-3SG hit-DO-DS-3SG 3DU-PAST
 ‘The two men hit each other.’
- b. *Ele ew-udo-co-b ew-udo-co-b ow-a.*
 1.DU despise-3SG-DS-3SG despise-3SG-DS-3SG 1.DU-PAST
 ‘We (two) despised each other.’

(Roberts 1987: 307, Nedjalkov 2007c: 153 より引用)

Mian 語, Hua 語, Amele 語に見られる特徴として, 転換指示 (switch reference) を表現することが挙げられる。(29) の Hua 語だが, *ga* はその動詞に対する主語の標示で *na* は 2 つ目の動詞の主語に対する標示 (つまり 2 つ目の動詞が異主語である標示) である。(29a) は 2 つの事象を逐次的 (sequential) にかつ因果関係として示し相互関係表現ではないが (最後の *e* は最終動詞の主語を示す標示), (29b) は *ga+na* が繰り返され, 同時的 (simultaneous) な相互関係をあらわす。また, (29b) の *ha* は *do* の意味の動詞で, 最後の *?e* は Joe と Harry を指す。ここから *ha ?e* の部分は Mian 語のジグザグ構文の 3 つ目の存在動詞に相当すると考えられる。また, 第 2 動詞に見られる (異主語) 転換指示の標示は 1 つ目の動詞の主語に対する標示であるが, これがより明確に示されている例をあとで取り上げる。Amele 語の接尾辞 *-b* は 3 人称単数を示すが, これは (30b) が示すように主語に関わらず固定化されている ((30a) では直接目的語は無形, (30b) では間接目的語を *-udo* として表現: なお Amele 語の形態素分析は容易でなく, Fedden 2013: 73-75 などを参照されたい)。(30b) の Amele 語の例は全体の主語が 1 人称であるが, 下位事象の主語は 3 人称単数である。Mian 語のジグザグ構文は全体の主語が 3 人称に限定されているから ((15) の例を参照), ここに *sese* 構文に相当する構文をもたない Amele 語のジグザグ構文と Mian 語のジグザグ構文の違いを見ることができる。

Amele 語の例の最後の語は相互関係の行為の参加者を示すと考えられるが, 共同行為という概念は相互関係を考えるにあたって重要であると思われる。Evans (2008: 33) は *John and Mary love each other.* の意味を考えるには John loves Mary. Mary loves John. John and Mary do this together. といった 3 つの命題を考える必要があると述べている (同 34 注 3 や同 83 も参照)。Kuuk Thaayorre 語においても共同行為の部分が明示的に表現される。

(31) Kuuk Thaayorre 語

- a. [*pam ith pul paanth-ak*] *nhiinat pul*
 man DEM 3DU.NOM woman-DAT sit.PST 3DU.NOM
 ‘The man and the woman sat down next to each other.’
- b. [*Jimmy-nthurr Johnny-n pul*] *ngarngkan thanp-rr-r pul*
 Jimmy-ERG Johnny-DAT 3DU.ERG yesterday kick-RECP-PST 3DU.ERG

'Jimmy and Johnny kicked each other yesterday.'

(Gaby 2006: 322, Evans 2008: 65 より引用)

Evans (2008: 65) が総括的代名詞 (summative pronoun) と呼ぶ (31a, b) の最後にある *pul* は事象参加者の全集合を示す。こうした共同行為の表現も相互関係表現を見る場合には無視できないと思われる。

相互関係の下位事象となる表現を繰り返す言語が Mian 語や Hua 語以外にも存在する。次の Yéli Dnye 語では *woni*…*woni* という固定パターンが 2 回繰り返され、その解釈が (英訳が示すように) 相互関係に固定される。したがって、類像的に下位事象を示していると考えられる。

(32) Yéli Dnye 語

kî pini woni ngê woni da mgoko,
that man the.one ERG the.other 3ImmPast+CLOSE hug
woni ngê woni myedê mgoko
the.other ERG the.one also.3ImmPast hug

'The one₁ man hugged the other₂, and also the other₂ hugged the one₁.'

(i.e. They hugged each other one by one.) (Levinson 2011: 188)

Levinson によれば、このパターンは逐次的な相互関係の下位事象に用いられるようである。次の Lao 語では下位事象が 1 人称と 2 人称に固定されているが、全体が指示する事象は 3 人称が参与する事象である。

(33) Lao 語

khacaw4 tii3 kan3 - khòj5 tii3 caw4 caw4 tii3 khòj5
3PL.P hit COLL 1SG.P hit 2SG.P 2SG.P hit 1SG.P

'They hit each other - I hit you, you hit me.' (Enfield 2011: 144)

Lao 語では共同行為をあらわす *kan3* を用いることが構文として確立している (数字は語彙声調を示し、略号の P は polite を示す)、*khacaw4 tii3 kan3* だけで相互関係を表現できるが、そのあとに上のように付け加えることができるという。意味的には 1 人称も 2 人称も関与しないので、それが表現として固定されたものだということがわかる。同様のことは現代中国語でも観察される。

(34) 現代中国語 (Modern Chinese)

Wōmen/nǐmen/tāmen nǐ kàn wǒ, wǒ kàn nǐ.
we/you/they you.SG look I I look you.SG

'We/you/they looked at each other.' (Nedjalkov 2007c: 153)

相互関係の下位事象表現が 1 人称と 2 人称の対であることは興味深い。論理的には 1 人称と 3 人称の対、2 人称と 3 人称の対が考えられるが、それらはおそらく使われにくいだろう。

言語における一般性と特殊性：Mian 語の相互関係表現

相互関係の認識の始まりは自己と眼前の他者との関係にあると想像できるので、1人称と2人称で相互関係を示すとしてもそれほど不自然ではない。

1つ目の下位事象ははっきり示すが、2つ目の下位事象は接続詞と主語だけで示すという言語もある。(35a) がそのパターンであるが、(35b) のようなパターンも可能だという。しかし、(35a) のパターンは固定化しており、現代語において単純な省略と分析することはできないという (Evans 2008: 87-88)。

(35) Iwaidja 語

a. *kawun lda jamin*

k-nga-wu-n *lda jamin*

3SG.O-3SG.F.A-hit-NPST CONJ 3SG.CTR

‘They (he and she) hit each other.’

b. *kawun lda jamin riwun*

k-nga-wu-n *lda jamin ri-wu-n*

3SG.O-3SG.F.A-hit-NPST CONJ 3SG.CTR 3SG.M>3SG-hit-NPST

‘She hit him and then he hit her.’ (Evans 2008: 87)

同じパターンが Mawng 語にも見られる。この言語は上の Iwaidja 語と系統的に近い関係にある。

(36) Mawng 語

K-ini-lakajpu-n *la yamin.*

PRS-3M>3M-ask-NPST CONJ 3M.CTR

‘They are talking to each other.’ (Singer 2011: 235)

Hua 語は Mian 語と同じトランスニューギニア語族に属し、その例は (29) としてすでに見たが (以下に (37) として再録)、Haiman (1980) にさらに興味深い例が挙がっているのでここで Hua 語について再び触れることにする。(37b) が Hua 語のジグザグ構文であった。

(37) Hua 語

a. *Joe Harry ebgi + ga + na Harry Joe ebgi + e.*

J. H. hit 3SG 3SG H. J. hit 3SG

‘Joe hit Harry and Harry hit Joe.’

b. *Joe Harry ebgi + ga + na Harry Joe ebgi + ga + na ha + ?e.*

J. H. hit 3SG 3SG H. J. hit 3SG 3SG do 2/3DU

‘Joe and Harry hit each other.’ (Haiman 1980: 532-3)

次の例もジグザグ構文だが、下位事象の主語に対応する人称が異なることから転換指示の役割が明確に理解できる。例えば、(38b) の最初の動詞 *hake* の主語は3人称単数 *-ga* で、2つ目の動詞 *haka* の主語は2人称単数 *-na* だが、その標示のあとの転換指示 *-ka* と *-na* が相

互の主語に対応していることが見て取れる。

(38) Hua 語

a. *D + ge + ga + da* Φ + *go + ga + na* *hu + ?e*.
 me see 3SG 1SG him see 1SG 3SG do 1DU
 ‘He and I looked at each other.’ (Haiman 1980: 533)

b. *Kgaisi? hake + ga + ka* *Kaisi? haka + na + na* *ha + ?e*.
 you-for look 3SG 2SG him-for look 2SG 3SG do 2/3DU
 ‘You and he look for each other.’ (Haiman 1980: 533)

これらの Hua 語の相互関係表現には高い類像性が見られる。Mian 語では 1 人称の場合、ジグザグ構文は使えず、*sese* 構文を使うことはすでに触れたが、(38) の Hua 語の例では 1 人称、2 人称を含む場合にもジグザグ構文が用いられている ((30b) で見た Amele 語のジグザグ構文でも 1 人称が可)。言語的な特徴として、Hua 語では主語に応じて動詞の形も変わること注意到したい。また、転換指示についても参照する節の主語との同異だけでなく人称・数という詳細な情報まで標示される。こうした特徴は Hua 語において *sese* 構文に相当する表現が生まれやすいかどうかという可能性と関連しているかもしれない。

以上、相互関係をあらわすために具体的な下位事象を表現する言語があることを見た。英語の *John and Mary love each other* のような表現に見慣れていると、本稿で取り上げた Mian 語のジグザグ構文や *sese* 構文あるいは上で触れた言語の表現は奇異に映るかもしれない。だが、それらは自然言語に見られる表現であり、一般言語理論が自然言語の解明を目指すのであれば、そうした言語を無視するわけにはいかない。ここで見た言語の相互関係表現はその下位事象を類像的に表現するが、そうした下位事象の表現自体はどの言語でも使われると考えられるので、ジグザグ構文が多くの言語に見られないのはある意味、不思議と言えば不思議である。それぞれの言語においてどのような表現方法が可能になるかは、その言語でどのような表現手段が発達しているか、確立しているかが深く関係していると思われる。例えば、ジグザグ構文をもつためには転換指示が発達しているかが大きく影響している可能性があり (そして 2 つの動詞が相互に言及すること自体が相互関係をあらわしているとも言える)、Mian 語ではジグザグ構文から *sese* 構文が生まれ、表現力を拡げている。英語で *each other* のような表現が用いられるのは、英語が動詞の項を基本的にあらわすことと無縁ではないだろう。日本語に「～合う」の形が見られるのは、日本語で複合動詞が発達していることと関係しているだろう。あるいは、言語がもつ特徴がある種の表現方法を阻止している可能性もある。例えば Mian 語において英語の *each other* や日本語の「お互い」のような表現が起りにくいのは目的語の標示方法と関係している可能性がある。Mian 語は目的語を (すべての他動詞で) 語レベルや接辞レベルで義務的に示すわけではないことは見たが、そうした言語において、相互関係をあらわす目的語の接辞が生まれ、すべての他動詞で標示

言語における一般性と特殊性：Mian 語の相互関係表現

されるようになるとするならば、それは通常、目的語を標示しない他動詞でも例外的に相互関係の場合のみ目的語を標示することになり、言語体系全体に影響が及ぶことになる。このように考えると、個別言語が（相互関係といった）特定の文法項目について先験的に定められた目録の中から表現手段や値を選んでいると単純に考えることはむしろかしく見えてくる。一言語の中に相互関係をあらわす複数の表現方法があることもその証拠の一つだが、それ以外にも相互関係を決まったパターンで表現しない、つまり相互関係をあらわす表現方法をもたない言語があるということも付け加えておく。Senft (2011) によると、Kilivila 語やタヒチ語 (Tahitian) には相互関係の表現がそもそも存在しないという。

5. まとめ：相互関係とは

相互関係は人間社会において重要な役割を果たす。それを考えると、文化人類学的に見て相互関係が重要である人々（タヒチ語の話者など）がそれを表現しないというのは奇妙だと言えるかもしれない。しかし、相互関係がその文化において当然のことであれば、それをわざわざ表現する必要はないとも考えられる (Senft 2011: 229)。

相互関係の根底には、人と人との関係がある。そして、おそらくそうした関係を人間が理解するためには、自分と他人は同じような存在物であるという認識や人がどのような心をもっているかという心の理論が関わってくると考えられる。すると、心の理論ができてくるまでには時間がかかることから、子供が相互関係を表現するまでにはある程度の時間が必要だとも考えられる（これらから、相互関係表現の解明には言語だけでなく人間の認知機構も研究の射程に含める必要がある；安西ら（編）2014などを参照）。同時に、相互関係自体がいくつかの要因に分解できることから（事象としての複雑性、2.1節で見たさまざまな相互関係のタイプ、逐次性・同時性など）、相互関係が言語化されるためには言語を取り巻く文化的な要因も関わってくる可能性がある。相互関係が言語として表現されるのが言語習得の初期でないとすると、そうした表現がそれぞれの言語がもつ基本的な特徴に左右されとしても不思議ではない。コーパスにおいて相互関係表現の出現頻度が低いことは、相互関係表現がいくつかの観点から見てそれほど単純ではないことの反映かもしれない (Evans, Levinson, Gaby & Majid 2011: 12-14)。

日本語の相互関係表現を考えた場合、「お互い」や「～し合う」といった表現に目が行きがちだが (Kosuge 2014などを参照)、特に子供がよく使う接尾辞「こ」を含む表現にも注目したい。「くすぐりっこ、取りかえっこ、順番こ、半分こ、にらめっこ、駆けっこ」などにあらわれる「こ」は相互関係や共同行為と深い関係にあると思われる。幼い時に用いられる表現とともに形成される概念は日本語の相互関係表現とどのように結びつくのか今後考えていく必要がある。最後に日本語話者が相互関係表現にどのような意味を感じ取るかを見

て本稿を締めくくりにする。

- (39) 赤ちゃんにじっと見つめられて、笑みをうかべない人はいないでしょう。赤ちゃんの澄みきった瞳には、すべての人の心を和やかにし、日常の些末な悩みごとを消しさってしまう不思議な力があります。「見つめ合うこと」は簡単なようで、実はいくつもの高いハードルを越える必要があります。まず、見つめ合う者同士が、「時間」と「場所」を共有していなければなりません。たとえあなたが、誰かを「見つめたい」と思っている、今その場所にその人がいなければ見ることはできません。そして——これがもっとも難しいことですが——あなたが見つめたその瞬間に相手もあなたのことを見返す必要があります。 (開 2011: 3)

ここから、「見つめ合う」には、「見つめる」という行為が複数存在すること以上の意味があることが読み取れるだろう。

* 本稿の議論の中心となる Fedden (2013) は梶田優先生の 2014 年度 東京言語学研究所 理論言語学講座「文法原論」で数回に渡って取り上げられた。本稿における誤りはすべて著者に帰されるものである。本研究は東京経済大学 2013 年度個人研究助成費（研究課題番号 13-20）による研究成果の一部である。

[参 考 文 献]

- 安西祐一郎・今井むつみ・入来篤史・梅田聡・片山容一・亀田達也・開一夫・山岸俊男（編）. 2014. 『岩波講座 コミュニケーションの認知科学』全5巻. 岩波書店.
- Comrie, Bernard. 2007. "Foreword." In *Reciprocal Constructions*, Vladimir P. Nedjalkov (ed.), XVII-XIX. John Benjamins.
- Dalrymple, Mary, Kanazawa, Makoto, Kim, Yookyung, Mchombo, Sam & Peters, Stanley. 1998. "Reciprocal expressions and the concept of reciprocity." *Linguistics and Philosophy* 21.2: 159-210.
- Evans, Nicholas. 2008. "Reciprocal constructions: Towards a structural typology." In *Reciprocals and Reflexives: Theoretical and Typological Explorations*, Ekkehard König & Volker Gast (eds.), 33-103. Mouton de Gruyter.
- Evans, Nicholas, Gaby, Alice, Levinson, Stephen C. & Majid, Asifa (eds.). 2011. *Reciprocals and Semantic Typology*. John Benjamins.
- Evans, Nicholas, Levinson, Stephen C., Gaby, Alice & Majid, Asifa. 2011. "Introduction: Reciprocals and semantic typology." In *Reciprocals and Semantic Typology*, Nicholas Evans, Alice Gaby, Stephen C. Levinson & Asifa Majid (eds.), 1-28. John Benjamins.
- Fedden, Sebastian. 2013. "Reciprocal constructions in Mian." *Studies in Language* 37.1: 58-93.
- Frajzyngier, Zygmunt & Curl, Traci S. (eds.). 2000. *Reciprocals: Forms and Functions*. John Benjamins.

- Gaby, Alice. 2006. *A Grammar of Kuuk Thayorre*. PhD Thesis, University of Melbourne.
- Greenberg, Joseph H. 1966/2005. *Language Universals*. Mouton de Gruyter.
- Haiman, John. 1980. "The iconicity of grammar: isomorphism and motivation." *Language* 56.3: 515-540.
- 開 一夫. 2011. 『赤ちゃんの不思議』 岩波書店.
- König, Ekkehard & Gast, Volker (eds.). 2008. *Reciprocals and Reflexives: Theoretical and Typological Explorations*. Mouton de Gruyter.
- König, Ekkehard & Kokutani, Shigehiro. 2006. "Towards a typology of reciprocal constructions: focus on German and Japanese." *Linguistics* 44.2: 271-302.
- Kosuge, Tomoya. 2014. "The syntax of Japanese reciprocal V-V compounds: a view from split antecedents." *English Linguistics* 31.1: 45-78.
- Levinson, Stephen C. 2011. "Reciprocals in Yélf Dnye, the Papuan language of Rossel Island." In *Reciprocals and Semantic Typology*, Nicholas Evans, Alice Gaby, Stephen C. Levinson & Asifa Majid (eds.), 177-194. John Benjamins.
- Nedjalkov, Vladimir P. (ed.). 2007a. *Reciprocal Constructions*. John Benjamins.
- Nedjalkov, Vladimir P. 2007b. "Overview of the research: Definitions of terms, framework, and related issues." In *Reciprocal Constructions*, Vladimir P. Nedjalkov (ed.), 3-114. John Benjamins.
- Nedjalkov, Vladimir P. 2007c. "Encoding of the reciprocal meaning." In *Reciprocal Constructions*, Vladimir P. Nedjalkov (ed.), 147-207. John Benjamins.
- Roberts, John R. 1987. *Amele*. Croom Helm.
- Saeed, John. 1999. *Somali*. John Benjamins.
- Senft, Gunter. 2011. "To have and have not." In *Reciprocals and Semantic Typology*, Nicholas Evans, Alice Gaby, Stephen C. Levinson & Asifa Majid (eds.), 225-232. John Benjamins.
- Singer, Ruth. 2011. "Strategies for encoding reciprocity in Mawng." In *Reciprocals and Semantic Typology*, Nicholas Evans, Alice Gaby, Stephen C. Levinson & Asifa Majid (eds.), 233-249. John Benjamins.